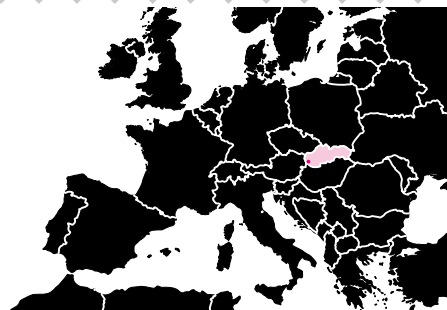




複雑な小国 スロバキアで地理を教える

フリー記者（スロバキア在住） 増田幸弘



ブラチスラバの微妙な位置

スロバキアの首都ブラチスラバは、国の最西端に位置し、オーストリアとハンガリーの2国に接している。ウィーンまでは電車で1時間あまりで、日本への行き来に利用するのもウィーン国際空港である。ブダペストにはバスで2時間ほどで着く。一方、かつて同じひとつの国だったチェコのプラハまでは4時間かかる。この街のおかれた微妙な地理的位置がわかるだろう。それはそのままスロバキアのたどってきた歴史的な位置でもある。

観光名所の集まる旧市街は、ヨーロッパにある他の多くの街と同じように、もともとは城壁に囲まれ、入り口には門がある城塞都市だった。城壁はすでに取り壊され、四つあった門もひとつしか残っていない。現存する聖ミハエル門から、聖マルティン大聖堂へと向かう路地には王冠マークが刻まれ、「王の道」とよばれている。

ブラチスラバ城下にある聖マルティン大聖堂の尖塔には十字架ではなく、王冠が誇らしげに掲げられている。王たちの戴冠式がここで執りおこなわれたことに由来する。とはいっても戴冠したのはスロバキアの王ではなく、ハンガリーの王である。1000年以上にわたり、スロバキアはハンガリーの支配下にあったのだ。

チェコとスロバキアの関係

ブダペストがオスマン帝国に占領されると、1536年から1784年までブラチスラバはハンガリー王国の首都となり、1830年までは戴冠式もおこなわれていた。しかし、ハンガリーもまたハプスブルク家の君臨するオーストリア帝国の支配下にあった。ブラチスラバには、プレスブルグというドイツ語名と、ポジョニというマジャール（ハンガリー）語名があるのはそのためである。

このあたりはひじょうに複雑で、実にわかりにくい。もっとも今日考えられている国家や民族という意識や考え方が中欧のエリアで強まったのは19世紀になってからのことだった。マリア=テレジアが女帝になったとき、近代化を促進するために戸籍調査をはじめたが、調査項目には民族はなく、日常に使うのは何語かで分けた。

1918年、第一次世界大戦が終わると、広大な領土を誇る多民族国家だったオーストリア帝国は解体された。スロバキアは同じく帝国の支配下にあったチェコと手を結び、チェコスロバキアとして独立を果たす。民族的にも

言語的にも近いことから、力を合わせて、ひとつの国をつくることになったのである。しかし、長らくハンガリーの支配下にあったスロバキアと、神聖ローマ帝国の一部として発展してきたチェコとでは、歴史的な背景はまったく異なっていた。

独立は繁栄をもたらした。工業や農業が発展し、鉱山資源が豊富で、小国なれども国力は高かった。しかし、ドイツもたらしたファシズムや、ソ連もたらしたコミニズムなど、周囲を取り囲む大国の論理に翻弄されつづけた。1989年、チェコスロバキアでも共産体制が終焉を迎え、ようやく本来の姿を取り戻した。

同時にチェコとスロバキアの関係にも変化のきざしが訪れた。国名をどうするかをめぐり、ハイフン戦争とよばれる政論が巻き起こったのである。それはスロバキアの自治を求める声の高まりを意味していた。独立したときからくすぶりつづけた問題でもあった。結局、1993年に両国は袂を分かち、別々の道を歩むことになった。

アール・ヌーヴォー様式の校舎

複雑な社会的背景をもつスロバキアでは、いったいどのようにして地理の授業をおこなっているのだろう。旧市街から少し離れたところにある、グレスリンゴヴァー通り18番地高校というギムナジウムを訪ねてみた。住所がそのまま学校名になっているのはずいぶん素っ気ないが、スロバキアではごく一般的だ。

スロバキアの学校制度では、9年制の小中一貫校を卒業してからギムナジウムや専門高校、職業高校に進む課程と、小学校5年生のときに9年制の中高一貫校のギムナジウムに進む課程の二つがある。グレスリンゴヴァー校にもこの二つのコースがあり、さらに普通科と数学科に分かれる。スロバキアでは名門校として知られ、国際数学オリンピックでも多くの受賞者を輩出してきた。

1626年に開校したイエズス会の神学校を前身とする。現在の校舎は、ハンガリーの建築家レヒネル=エデンが設計したアール・ヌーヴォー様式の建物で、2010年に全面修復が終わったばかり。薄クリーム色の外壁が印象的だが、隣接する青い教会と対をなしている。同じ建築家による設計で、空色の外壁が目を引く奇妙な建物だ。

マジャール語からスロバキア語へ

1908年に校舎が完成したとき、授業はマジャール語で



グレスリングヴァー校の授業風景



高校2年生向けの地理の教科書



歴史地区の中央広場にある旧市庁舎

おこなわれた。当時、ハンガリーはスロバキア人の存在を認めず、スロバキア語による教育も禁じていた。学校の記録によれば、独立後の1919年から23年はチェコスロバキア語で、それ以降はスロバキア語での授業がおこなわれている。チェコスロバキア語という言葉は存在しないのだが、こうした記録が残っているのは興味深い。「チェコスロバキアの時代、地理で教える内容はチェコのことを中心で、スロバキアのはほんのわずかでした。人口比や面積比でもあるのですが、スロバキアのほうが遅れた地域との意識があったことも大きいでしょう。現在の指導要領ではチェコについて学ぶのはわずか1時間です。さすがにそれでは少ないと思うので、私は2時間教えています」とグレスリングヴァー校で地理を教えるミハル=エリアーシュ先生（44歳）はいう。

地理の授業は、5年生のときと、日本の高校2年生にあたる8年生のときの2年、勉強する。授業数は週2時間。以前は4時間あったが、カリキュラムの変更で半減した。授業内容の7割は指導要領に沿う必要があるが、残りの3割は先生個々の裁量で自由に決められる。

自然と人間と関係を伝えたい

2009年まではスロバキア語でつくられた高校向けの地理の教科書はなく、チェコ語の教科書を代用していた。不足を補うため、先生がプリントを自分でつくる必要があったという。先生自身が各国に出かけて撮影したプロ並みの写真を合わせ、生徒の理解を助けてきた。

いざ教科書ができてみると、今度はちょっとした専門書並に詳しいものになった。スロバキアは小さな国なので、どうしても内容が深くなりがちになるようだ。教科書ができたことにより、スロバキアのことを教えることに重きが置かれるようになった。そのなかでも、できるだけ世界のことを教えるのが、生徒が世界を理解するためにも大切だとエリアーシュ先生は考えている。

スロバキアには自動車メーカーを中心に韓国企業が多く進出し、日本からの進出は限られている。それでも先生は日本を重要な国と位置づけ、生徒の関心も高いため、2時間かけて教えている。隣国で、今日も結びつきが強

いチェコと同じ授業時間である。中国や韓国、台湾はまとめて1時間となっている。

「自分の住んでいる国のことを知るの大切ですが、いまは少し行きすぎかもしれません。振り返れば、地理や歴史といった科目は、多分に政治的なものと痛感しています。共産体制時代にはソ連の地理を2年も勉強しました。しかし、そうしたことを越えて、生徒に自然と人間との関係を伝えることが、地理の教師として大切なことだと信じています」とエリアーシュ先生はいう。

若い国の未来

エリアーシュ先生による8年生の地理の授業を参観した。一クラスの生徒は25人あまりで、授業は大学のような階段教室でおこなう。この日は生徒による発表が中心で、一人ひとりが前に出てプレゼンしていく。一人の持ち時間は15分ほど。パワーポイントで作成した資料をプロジェクターで見せながら発表する生徒もいる。各々自分で行ったことのある場所をテーマにしているので、自ずと熱も入る。発表の後、エリアーシュ先生が補足と講評を加え、生徒に考えるきっかけを与えていく。

最後は生徒からの質問を受けるかたちで、参観をしているほくが日本について発表することになった。漫画やアニメのことや、お寿司をはじめとする日本食のことなど、的を射た多彩な質問が飛び交う。実際、日本に行ったことのある生徒もいた。彼女は日本のサービスがとてもよいと印象づけられたようで、「外国人相手だから特別なのか」と聞いてきたのがおもしろかった。スロバキアのサービスが決してよいわけではないからだ。

スロバキアは独立して20年に満たない若い国である。長年、ハンガリーやチェコの下に甘んじてきたが、2009年、両国に先んじてユーロを導入した。そのころからスロバキアの人びとは自信をもち、街もずいぶん明るくなったと感じる。ほくは2006年からブラハに、2010年からはブラチスラバに暮らしているが、その変化を肌で感じてきた。チェコとスロバキアというと、日本ではどうしてもブラハに目がいきがちだろうが、スロバキアに対する関心が少しでも高まることを願っている。